時計の針が止まる時

さらさら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時計の針が止まる時

【Ｎコード】
Ｎ３８３１Ｚ

【作者名】
さらさら

【あらすじ】
――悲劇が見たい。人々は、彼の気まぐれなその言葉に従い、五つの悲劇を紡ぎ始めた。この物語は、その五つの悲劇を綴った物である。

悲劇を求める彼

「悲劇を見たい。それも、こう、ただ絶望に突き落とすような奴ではなく、突き落とした後に少しの希望が、薄明のように見えるような悲劇が良い。世の中、そんな物はごまんとあるが、それでも見たい」

雲の上から、駄々っ子のように彼がそう叫ぶと、美しい白雲だったそれは突然黒みを帯びて、雨となって地を濡らし、雷となって地を揺るがした。その傍若無人な破壊に、人々は彼に、五つの悲劇を捧げる事を強要された。

人々が、彼に、悲劇を捧げる事を伝えると、彼は満足げにおよそ雲の上の者とは思えぬような悪辣な笑みを浮かべた。すると、雲はたちまち霧消し、降った雨は川を一本作って海へ流れ込み、雷は姿を消して元の静寂を返した。

彼は、人と同じようにある、五つの指の、親指を除いた四本の指を見せ、それから元と同じように人々に見えない場所へと消えていった。

人々は、そうして、四千年の間に五つの悲劇を、それも彼の望む形で作らねばならなくなった。これは、捧げられた五つの悲劇を綴った、物語である。

高校生活・1（前書き）

―――あらすじ―――

いつでも帽子を被っていて、ちょっぴりお茶目だけど、根は几帳面であまり目立ちたくない女の子、智子。都会から遠く離れた田舎に暮らす智子は、古ぼけた木造校舎の高校に通っていた。腐れ縁とも呼ぶべき愛する友人、雄樹とじゃれ合う日々に、半身で満足しながら半身では強い不足感を得ていた智子の耳に、転校生の噂が飛び込んで来た。一風変わった転校生は、強く智子の心を惹きつけて……？

高校生活・1

「寒いっ！」

四方を山に囲まれながら、どこやらか吹き込んでくる霜月の寒風に、お気に入りの青くて深い帽子を飛ばされないよう、智子は帽子の頂点を強く押さえながら、まるで誰かに文句を言うように、およそ女性らしい気品とは程遠い様、つまりは唾を飛ばしながら、そう叫んだ。

「寒い、さむさむ、寒いよ、雄樹ぃ……！」

「そんなする程寒いかぁ？　こんなぐらいでマフラーなんてしてるの、お前ぐらいだぞ？」

隣を歩く雄樹は、寒気対策に躍起になって重装備な智子に比べると、幾分か軽い服装だったが、それでもずっと風に当たり続けた手の平は、その寒さに耐え切れず、両手をすり合わせて暖を取っていた。山に囲まれた地域らしく、この辺りは太陽が昇るのが遅く、朝方は特に冷える。まだ、太陽が山にその全身を持ち上げられているような時間だから、実気温も体感気温も低く、山の向こうから来た人々なら、寒くて震えるような気温だった。

「ま、俺なら、まだ半袖半ズボンもいけるだろうな。絶対やらないけど」

「雄樹、夏服のセンス最悪だもんね」

「違ぇよ！　そういう意味で言ったんじゃないっての」

その十一月の寒空の中を、良く言えば雄大な、悪く言えばだだっ広い田んぼ道をくぐり抜けて、二人はこの片田舎へたった一つだけ建てられた、全校生徒数十五名の高等学校へと、東へ東へ歩みを進めていた。二人で登校するのは、小学校の頃から変わらない、”いつもの事”だ。

「ただほら、子供は風の子って言うだろ？」

「大人は火の子、とも言うね。雄樹はいつまでも子供って事かぁ」

二人の足下は、舗装すらされてはいない。周りの背の低い木々と、真っ直ぐに伸びた土の一本線だけが、ここが道である事を示しているのだった。

ひらり、と、歓談を続ける二人の前に、二，三枚の濃緑の葉が舞い落ちてきた。智子は特に興味を抱かず、そのまま歩き続けようとしたが、隣で雄樹が興味深そうな目でその葉っぱを拾い上げて立ち止まったので、仕方無く振り返って雄樹がじっと眺めているその葉っぱを見た。

「何、この葉っぱ？」

「ヒイラギ……かな。ほら、尖ってて、反りがあるだろ？」

雄樹はそう言いながら、今度は葉から目を外して、辺り三百六十度全体を見渡すように、ぐるぐると首を回し辺りの景色を見やった。

「でも、おかしいな。ヒイラギなんて、この辺りにはない筈なんだが」

「風で飛ばされて来たんじゃない？」

「葉っぱは上から落ちてきたんだぞ？　風に乗ったにしても、無理があるだろ」

雄樹は、まるで自らを探偵だと思い込んでいるかのように、あごに右手の指をあてて、じっと考え始めた。元から、葉っぱの由来などに興味のない智子は、その間中ずっと、近くの木を観察したり、雨が降る気配のない空をボーっと見詰めたりしていたが、ついに耐え切れなくなって、

「雄樹ぃー……寒いよぉー……」

と、彼の右袖を引っ張った。

「ん、あぁ、ごめんごめん。どうでもいい事に時間食っちまったな」

うたたねしていた所を誰かに揺さぶられたように、ハッとした表情を見せながら、雄樹は葉っぱを空に投げ捨てて、さっきよりも少し高くなった太陽へ向かってまた足を踏み出した。

「ほんとだよー。今度、缶ジュース一本おごりね」

「それは断る」

智子が、不満を示すように、自分の左肩に掛けているハンドバッグを、大袈裟に叩いた。雲ひとつない空、影ひとつない道。これが二人の、”いつもの登校道”だった。

高等学校、とは言うものの、田舎にポツンと建てられた全校生徒十五名のこの私立高には、先生も校長先生を含めても三人しかおらず、授業などでは、二人の所属する第二学年に生徒が四名しか居ない為に、全員が顔見知りで仲が良いという、非常に和気あいあいとした活気のある場所だ。

その活気ある扉を、チャイム代わりのシンバルの音と共に開いて、二人は息を切らしながらそれぞれの椅子に座った。

「まーたギリギリね。あんた達、ちょっとは時間を考えて歩いたら？」

教壇から身を乗り出して、若い女性の、眼鏡を掛けた佐藤先生が、まるで友人でも見るような親しみのある目で、二人に言った。

「今日は智樹が……」

「あーはいはい。そんな言い訳は、毎日聞いてるわよ。仲睦まじいのは分かったから、とりあえずシンバルが鳴る前に座ってなさい」

佐藤先生は、そう言ってにっこりを微笑むと、一時間目の授業である現代文のテキストを開き、非常に見易い字で、黒板に大きく『二十分間・黙読』と書いた。

高校生活・2

――出会いて別れしは、喜ありて悲ある最もなり。別れて出会いしは、悲ありて喜ある最もなり。

一時間目、二時間目と風のように過ぎて、授業はもう三時間目、古典の折り返し地点まで到達していた。安物のコピー用紙に細かく印刷された文字を解読している途中で、智子は気になる一フレーズを見つけ、読み易いようにノートへと書き写した。

出会いて別れしは、喜ありて悲ある最もなり。別れて出会いしは、悲ありて喜ある最もなり。当たり前の事しか言わない古典文章の中で、やはり当然の事を述べているだけの文章なのだが、妙に、心が惹きつけられる。

「出会いて別れしは、喜ありて悲ある最もなり。そうね、この辺りはかなり現代語に近いから、訳を見なくても分かるわね。智子、一応、訳しといてくれる？」

ちょうど目を向けていた部分に話題が移って、智子は思わず机を強く蹴り、その後襲ってきた無尽蔵な太ももの痛みに、小さく呻いた。

「あら……。さては寝ていたわね？」

「ち、ちが……ち……がいます！」

痛みがひどくて、上手く言葉が繋がらない。智子は時々、こうやって壁や机にぶつけて、体の各所を痛める事があった。自分でも、抜けている所があるのだろうなぁ、と思って、それなりの注意を払いながら過ごしているのだが、ああやって不意打ちで来られると、つい足が机の方へと向かっていってしまう。

「で、出会って別れるのは、喜ばしい上に悲しみもある一番の事である。……とか」

「とか、がなければ満点よ。惜しいわね」
佐藤先生はそう言って眼鏡をクイッと上げたが、太ももの痛みの方に意識が行き過ぎて、悔しいなんていう感情は全く浮かんでこない。智子はしばらくの間、痛みを堪える為に服の襟を噛んでいたが、ある時思い直して、すぐ右隣に座っている雄樹の肩から腕にかけてを、平手で思いっ切り三，四度叩いた。
「痛っ、痛いって！　何だよ！」
「痛みの……おすそ分け……っ」
「痛！　そんなの要らねえよ！」
「はいはいそこー。ラブラブなのは分かったから、少し静かにしてちょうだいねー」
総勢五名の教室に、大きな笑い声が響き、二人の顔には、小さく赤いランプが灯った。

三時間目が終わると、お昼休みになる。午前三時間、午後三時間で分けられた学校はあまり一般的ではないが、授業自体がずっと同じ椅子、同じ教室、同じ先生で行われる為に、連続で繰り返すのには、三時間が限界なのである。
教室の四人の内、二人が女子、二人が男子なので、昼休みの住み分けも非常にスムースに決まっていた。上下同士になっている二人が席を合わせ、弁当を広げ、取りとめもないながらに彼らにとっては重要な事がらを話し続ける事で、お昼休みの時間を埋める。席を分けているからと言って男女の仲が悪いという訳ではない。四人の間のどの組み合わせも、二人だけで小部屋に残されれば、延々話を続けられるぐらいには、気心が知れ合っている。それでも男女で分けて食べているのは、ちょっとした都会への憧れから、都会の真似をして分かれているだけの事だった。
「あ、卵くれよ」

「……言う前から取るなよ。別に良いけどさ」
雄樹は、自分の真正面から伸びてきた箸に、綺麗にまとめてあった出汁巻き卵をくちゃくちゃにされ、いくらか不機嫌な表情でおかかふりかけの掛かったご飯を掻き込んだ。
「タコさんウインナーも頂きぃ♪」
「自分の弁当食えよ！　お前んとこにもあるだろ！」
「人の弁当から食べるタコさん……何故だかこれが一番美味いんだな。おっと、俺のはやらんぞ？」
「いや、要らない」
お弁当が、勢いのある箸によって、蹂躙されていく。ほうれん草のおひたしが、ポテトサラダが、デザートの蜜柑が、潰されたり飛ばされたり、割られたり持って行かれたりしている。
「……」
”いつもの事”だった。毎日、昼食は彼と向き合って、美しいお弁当を汚されながら食べる。別に嫌な事ではない。むしろ、楽しい。その内、箸は動きを止めて、自分の所へと帰って行った。お弁当箱の中は、見るも無残な状態だったが、それでも半分以上おかずは残っていた。
「人の弁当箱のトマトってのは、何か潰しにくいよなあ」
「蜜柑は潰すのにか？」
「何かこう、力を込めないとダメだろ？　なんか可哀相でさ」
「そんな心があるなら、人の弁当は取るな」
雄樹は、生き残っていたプチトマトのへたを、お箸だけで器用に外して、口へと放り込んだ。口の中で、飴のようにいくらか舐めまわした後、奥歯で一気に噛み切ると、雄樹の口の中に一気に酸味が広がった。二度、三度と、噛むと、酸味が強くなっていって、より美味しい。
「ごちそうさまでしたー！　む、雄樹君、食べるのが遅いようだね」
「お前が弁当漁るからだろ！」
またご飯を掻き込んで、水筒のお茶で飲み干す。雄樹は、唯一残

ったほうれん草を、少し量が多いのを分かっていながら、箸で全部すくって、口に含んだ。噛む。飲む。

「ごちそうさまでした」

お箸を箸袋に入れ、弁当箱から出て飛び散ったかつお節の破片をハンカチで拭き、弁当箱を片付ける途中、雄樹はふと、隣の二人の女子を見た。二人は、可愛らしいうさぎのお弁当を、二人で突っつき合って食べていた。まだ、中身は、半分と減っていない。

「良いか？　ああ言うのが、健全な昼ごはんって奴だ」

「何言ってんだよ。うさぎの顔を割って、中に具を詰めてるんだぜ……？」

「今、お前とは分かり合えないと思った」

学校の周り……と言うより、この山に囲まれた村には、暇を潰せるスポットなど一つとしてない。ましてやこんな昼時には、商店街も殆どが昼休憩を取っていて、開いていないから、学校の外に娯楽を求めるのは無理だった。

二人が食べ終わるのを待つ。これもまた、”いつもの事”だった。

高校生活・3

昼休みは五十分間取られているが、女子二人の食事の終了に合わせても、十五分以上余るのが常だった。師走前の寒気が吹き込んで来ないよう、カーテンまで厳重に閉めてストーブに火を付けると、四人は机だけ後ろに下げて、ストーブを椅子で囲んで座った。

「いやぁ、やっと今年もこの季節が来たな！」

「何？　何かあったっけ、楠君？」

「ふふん。分かってないな。去年の半月後ぐらいを思い出してくれたまえ」

智子は、楠のヒントに従って、昨年の十二月頃を回想し始めた。山に四方を囲まれているここでは、冬はひどく気温が下がり、それに伴って雪が降る。恐らく、去年の十二月にも、雪が積もっていたのだろう。

「ああ、雪だるま作りだっけ？」

「ご名答！　その通り、雪合戦だ！」

楠は、一人椅子の上に立ち、空にでも羽ばたきかねない程の勢いで、そう叫んだ。

「懐かしいわね。今年もやるの？」

「当然だ！　神野、去年の恨み、晴らしてくれるわ！」

「何の事かしら？　全く記憶にないわね。ええ、全く」

神野の一言一句に、まるで打撃を受けているかのように仰け反りながら、楠は自分の頭をくしゃくしゃ、と両手で？きむしった。

「無茶苦茶ぶつけといて、よくも忘れやがったな！　お前のせいでな、こちとら後頭部が、未だに痒い感じがするんだぞ！」

「だって楠、弱いんだもの」

「おい、暴れるな。風が立って寒いだろうが」

「おま……悔しくないのか？　男子チーム、ボコボコにされたんだぞ？」

楠が肩を掴んで激しく揺するので、雄樹はさすがに両手をストーブに当てたままには出来ず、がっしりと掴んでいる楠の、脇腹に手を伸ばした。それが触れるか触れないか、というタイミングで、楠は肩から手を離して、素早く雄樹の左前の席に戻った。
「ふぅ……。華麗なるフット・ワーク」
「さすが楠君だねー。雄樹のお触り・ハンドから逃げるなんて」
「その言い方はやめてくれ。何か変態みたいだ」
雄樹が教室の前、黒板の上に掛けられた時計を見ると、四時間目の開始時間の十分ほど前をその針は示していた。
「でも、今年は暖冬だと聞くわよ？　雪、そんなに積もるかしら」
「それは問題だな。雪が降らないんじゃ、楠の雪辱の果たしようがないし」
「おおー。上手い。雄樹って落語家志望だっけ？」
と、智子はストーブの上で手を上下にぶらぶらさせながら、訊ねた。
「その通りだ」
「……え……ええっ！　って、熱っ！　熱い！」
また興奮して、智子は自分の手を、熱くなっているストーブの上部金属部分に押しつけてしまった。そして、赤くなった右手の小指を、その熱さに耐えかねて、左手で覆ってぶんぶんと振った。
「馬鹿ね。ちょうどここに氷水があるから、早く冷やしなさい」
神野は、いつの間に移動したのか教室の外から中へ入ってくると、いくらか呼吸を乱し肩を上下させながら、智子の前にバケツ一杯の氷水をどん、と置いた。
「かか神野ちゃん、あああありがととととと……ふへー……」
痛みか熱さか分からない程に強い右手小指からの信号に、智子は口も思うように動かせないまま、その右手小指を氷水にじゃぼん、と浸けた。しばらくして、痛みが冷たさに隠れて感じられなくなった時、智子は力が抜けたように一つ溜め息をついた。
「相変わらず、過保護だよな。雄樹の出る幕、一つもないじゃん」

「何で俺だよ」
「ん、付き合ってんだろ？　夏服ダメ男さん」
「付き合ってねえよ！　あと、夏服は今日二回目だから、触れるなって！」
智子に何かあった時には、常に神野が素早く対応して、二次災害を防ぐ。その隣で、楠が雄樹を、ここぞとばかりに冷やかし、いじる。その内、智子と雄樹が赤くなって、あとの二人がそれをまた面白がって、話のタネにする。
この場所でも、冬は去るし、夏は来る。だが、お昼休みのこの光景は、いつどんな季節であっても、変わりはしないのだった。

帰りのホームルームが済む頃、時計は三時を少し回り、さすがの太陽も、山から遠く離れた空へと飛び出してきて、外の気候もいくらばかりか過ごしやすい物に変わると、四人は学校を終えたその体で、学校からほんの二分ほどの所にある、こじんまりとした、ブランコだけ四つある公園へと向かう。いつもここで四人は、春なら春、秋なら秋なりの風を感じながら、駆け回ったり話し尽くしたりするのだ。
今日も、雲に遮られずにきちんと地を照らした太陽の下、四人は各々ブランコへ座って、行き着くあてもない、適当な娯楽話を楽しんでいた。
「十一月って、どうしてこんなに寒いのかなぁ……。私、最近お布団から出るのに、すんごい苦労するんだよ？」
「確かに低血圧って感じだな、智子は。ボーっとしてるイメージが、ないかと問われれば凄くあると答えたいぐらいに」
公園の入り口の方を向いて、左から智子、楠、雄樹、神野の順番で座る。最初に、誰かが仕切ってこう決めた訳ではなかったが、何度もここへ通っている内に、自然にいつもこう座るようになった。

「ひどっ！　楠君ひどっ！　私だって、ちゃんと色々考えてるんだよ？」
「例えば？」
「えーっと……うーんと……。そうそう、朝なんて、このヒイラギの葉っぱはどこから来たのかなぁ、なんて風流な事考えたりしたしさ」
「それ、俺だろ」
雄樹は座ったまま、ブランコをいくらか加速させた。風が耳の辺りを駆け抜けていくのを感じると、寒いのだが、同時に心地良い。
「何があったのか聞きたいわね。ヒイラギ」
「ん……いや、行き道でさ、あの辺りヒイラギなんて無いんだけど、空からヒイラギの葉っぱが何枚か降ってきたんだよ」
「ヒイラギって、どんな木なんだ？」
「確かここにはあった筈だぞ。……ああ、あの木だ」
と、雄樹は入り口の傍に植えられた、背の低い木を指差した。木は、深く緑に生い茂っていて、その葉の先の棘は鋭利で、指を引っ掛けると簡単に切れてしまいそうだった。
「この葉っぱが落ちてきたのか？」
「ああ。風に乗ってきたんだと思ったんだが……よく分からんままだ」
「何よそれ。雄樹らしいけど」
今度は神野が、雄樹に競い掛けるようにしてスピードを上げた。それに乗じて楠が立って二人を追い抜こうとすると、そこへ智子も加わり、四人のブランコ競争がいつもの如くスタートした。

高校生活・3（後書き）

一点・一点の評価を頂いたので、もっと精進せねばと思いつつ。

高校生活・4

四方を囲む山の内、一番高い山は西の山である。だから、日の昇るのが遅い以上に、沈むのが非常に早く、いわゆる夕方という時間には、かなり肌寒くなる。また、冬場特有の事として、道にある木に与えられた水が土に滲み込むまでに凍って、土の道にも関わらず非常に滑り易くなる為、殆どの住人は家に引きこもって外に出ないようになる。その為、帰宅する智子と雄樹の視界には、それぞれ同士以外の他は、一人として入ってはいなかった。

「雄樹ぃー……。温かいお茶が飲みたいよー……」

「そりゃ、無茶だな」

「……あれ、ホントに落語家志望なの？」

往路と復路は、当然同じ道を通るのだが、道を綺麗に彩る木々の管理番の者の粋とも言うべき配慮で、同じ場所を通るのでも、通る向きによって違う木、違う花が見えるようになっているので、四季折々の花の色と合わせて、この道を歩いていて飽きるという事はない。この花が何という名前で、あの木が何科に属するのか、という知識ではなく、この季節にはこんな花が咲き、こんな木が色付くのだと覚えられるような、そんな道だった。

「違うに決まってんだろ。まあ、漫才師なら考えてない訳じゃないが」

「えー。雄樹に漫才師は無理でしょ。相手によって、性格変わるしさ」

「人聞きの悪い事言うなっつの！　お前だって、知らない外国人に道を訊かれた時なんか、黙りこくってたじゃんか」

「だって、突然だよ？　黒い人が、流暢に日本語喋ってきたら、おののいて当然だよ」

この辺りは、四方山に囲まれて、交通の便が悪い事この上ないのだが、それでも豊富な自然と残った田舎感を堪能しに、日本中、世

界中から、年に数百人の観光客が訪れてきていた。唯一一軒だけある宿は、そんな自然を愛する旅行者の間では、非常に接客の良い宿として評判になっており、この辺りはそういった観光の面では、他の田舎よりも一歩進んでいると言って良かった。
「中学ん頃は、もっと暗いイメージだったんだけどなぁ。って、この話ももう、二度目だけど」
「三度目だよ。高校に上がったら、すんごい過疎ったから、って話」
智子は、毛糸で編まれた真っ白の手袋を着けた両手で、頬を挟んで冷えないように暖を取っていた。毛糸は通気性もよく、暖かいとは言っても底が知れていそうなものだが、着用した手でずっと押さえておくと、驚くほどに温もりが感じられる。
「そういや、高校終わったら、どうするんだ？」
そんな智子を羨ましげに見、素手同士をすり合わせながら、雄樹は言った。
「進学でも就職でも、山越えないと駄目だしょ」
「んー。正直、進学出来るような学力はないと思うんだよねぇ。就職って柄でもないし、家業手伝い、にでもなろうかなぁ、って」
「農業かよ。まあでも、そうなるよなぁ」
石を、ちょっとした憂さ晴らしに強く蹴る。石は、土に跳ねて大きく右に進路を曲げると、最後には小さな木の根元に落ち着いた。
「後々の事は、後々考えたら何とかなるっしょ。やっぱり、目の前の、現実に生きていかないとねぇ」
「変に楽観的だよな、お前」
「まあ、ポジテブ……ポジェテブ……んー、あー、ポ何とかシンキングが取り柄っていうウリで行きたいんだよね」
「ポジティブシンキングな。お前には、それはまだレベルが高すぎだと思うが」
都会から遠く離れたこの土地は、立身するにはあまりに不便な環境だった。就職してお金を稼ぎたい、大学へ行って学問を修めたい、と願う者達は、全員が全員、高校進学までにここを離れ、都会に近

い学校へ移ってしまう。そうでもしなければ、この土地に埋もれ、この土地に死ぬ事になってしまう、と考えるのである。その点では、高校二年生にもなって、未だにこの土地に残っている彼らには、これから先もずっとここで暮らしていく事が約束されていると言って良い。

平穏無事な、スローライフ。まだ、その善し悪しを判断する段に、彼らは至っていないのだった。

明くる日の朝も、二人は同じように、同じ道を、学校へ向かって歩いていた。相変わらず空には殆ど雲がなく、全くの青空をしているのに、底冷えするような寒さがある。

「ゆゆ雪、ふふふふ降りそうだだねえぇ……」

昨日から、青い帽子と白い手袋以外の服は別の物に変わっていたが、昨日に比べて寒さに震える度合いはあまり変わってはいなかった。

「だなあ。雲が出てきたら、雪も降るんじゃないか？」

「雪が降ったら、雪合戦だっけ？　……まだちょっと、降らなくて良いかな」

ずんずん、と歩いている間に、昨日、ヒイラギの葉が舞い落ちてきた場所へ差し掛かったが、その事を全く意識外に置いていた二人はそれにも気付かず、ただ談笑の内にその場所を通り過ぎてしまった。だが、そんな二人の足跡に重なるように、今日もヒイラギの葉は、どこよりか降り、落ちてきていた。

高校生活・４（後書き）

高校生活・１にある　――あらすじ――　をちょっとだけ訂正しました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3831z/

時計の針が止まる時

2011年12月18日23時54分発行